

俳句通信

特別作品25句 松岡隆子「棟の実」

特集〈80代俳人20句競詠〉

青山 丈 「晩夏・初秋」
 船越淑子 「貢進」
 名和未知男 「秋の走り」
 松浦加古 「涼新た」
 高橋さえ子 「祭笛」
 柏原眠雨 「馬洗ふ」
 石渡 旬 「夕蟬」
 大輪靖宏 「夏は過ぎゆく」
 好井由江 「目印」
 今瀬剛一 「夏から秋へ」
 岩淵喜代子 「野分めく」
 太田土男 「秋雲」
 佐藤麻績 「土偶」
 山崎房子 「雁渡し」
 秦 夕美 「さはいへど」

——秋浦歌(李白)への返歌——

須原和男 「傘寿」
 酒井弘司 「流れ星」
 米山光郎 「でで虫」

【鑑賞会】波戸岡旭第7句集「鶴唳」を読む
 参加者 須原和男・藤本美和子・波戸岡旭

【新連載】俳句の一欠片①
 しんしんと一『篠原鳳作全句文集』林桂



【3人競詠20句】

宇都宮敦子「フィヨルド」
 小俣たか子「雀の目」
 平栗瑞枝「鉄の一撃」

【実力作家30句】

坊城俊樹 「愛子」
 柳生正名 「瓜ん子雲古」

零余子（むかこ）

ほろ／＼とぬかごこぼる、垣根かな
雨傘にこぼるる垣のむかごかな

正岡子規

室生犀星



零余子

灯籠や立派な松のあるような庭ではなく、まるで広場のような生家の庭に近所の子とも達が集まって、石けりをしたり、野球の真似事のようなことをしてよく遊んだ。桜や鵝鶯など花の咲く木はその端っこに植えられていた。そしてたった一本あった背の高い梨の木が何故か蔵の傍にあった。その木の下に零余子の取れる蔓が絡まっていたことを思出す。ほろ／＼落ちるその実を採るのは面白かったが、あくまで遊びでありそれを零余子飯として食べた記憶はほとんどないのだが……。それよりも父がその下に面白い程深い穴を掘り、山薯を掘り出していた時の嬉しそうな顔がほんやりと蘇り来るのである。

八月末に母が九六歳で亡くなった。晩年は弟の家で暮らしたものの、八五歳になるまで過ごした故郷に納骨を予定している。その時は、弟と空き家となった生花家に入り、零余子のとれた辺りを歩いてみよう。

祖母がゐてちははがゐて零余子飯

早智子

棟の実

松岡隆子

降りだしの雨やはらかき花すすき
ゆりの木の葉ずれことさら秋澄めり
まさをなることを一途に棟の実
桔梗のきりりと雨を零しけり
秋声のおのづと武蔵国分寺
澄む秋の-highは神の在すところ

特集

〈80代俳人20句競詠〉

80代の実力作家18人による20句競詠です。

青山 丈

石渡 旬

佐藤麻績

船越淑子

大輪靖宏

山崎房子

名和未知男

好井由江

秦 夕美

松浦加古

今瀬剛一

須原和男

高橋さえ子

岩淵喜代子

酒井弘司

柏原眠雨

太田土男

米山光郎

連載①「俳句の一欠片」
ワシベリス

しんしんと——『篠原鳳作全句文集』

林 桂

篠原鳳作は「傘火」(昭和九年八月号)掲載の「新興俳誌展望」で、「走馬燈」にふれて次のように書いている。

いかづちの香の漲りぬ雨襖
いかづちの香を吸へば肺しんしんと

長い間闘病床にある茅舎氏の句には何時も珍しい感覚と異常な力が漲つてゐる。茅舎氏の句とする対象は病床にあるせいか決して所謂新しい素材ではない。氏は常に平凡なる素材を、新しい感覚と力強い表現とで全く個別的な新しい香気あるものとされてゐる。

川端茅舎句への賛辞である。そして、二句目の「しんしんと」と「肺」の措辞は、鳳作の代表作である、

しんしんと肺碧きまで海のたび

を連想させる。鳳作の「海のたび」は、茅舎の本歌取りではないのかと思いたくなる。はたして、鳳作が連作「海の旅」を「天の川」及び「傘火」に発表したのは、昭和九年十月である。時系列的に影響関係は見事に符合する。

満天の星に旅ゆくマストあり
船窓に水平線のあらきシーソー
しんしんと肺碧きまで海のたび
幾日はも青うなばらの円心に
甲板と水平線とのあらきシーソー

連作の中に埋め込まれた一句は、病床茅舎の句の本歌取りを払拭した凛然とした立ち姿となっている。

「海の旅」のモデルは、鳳作の赴任地である沖縄・宮古島と故郷・鹿児島との船での往来であろう。「三日も船にゆられて帰つてくると、すぐその日に傘火を正月、三月、五月といふ具合に奇数月を編集しないかといふ事で『合点だ!』とひきうけた」(『帰郷と改号の弁「傘火」昭和九年十二月)とあり、三日の旅程を要したことがわかる。

ここで大切なことのもうひとつは、鳳作は三年半の沖縄・宮古島生活をこの年の秋に引き上げ、鹿児島に帰ってきたことである。かつ雲彦を鳳作に改号したのである。鳳作にとって転機の年である。鳳作はもっと早く帰ってきたかったようだ。「小生も多分こちらは三月までと思ひます



【鑑賞会】

波戸岡旭第7句集『鶴唳』を読む

参加者／須原和男・藤本美和子・波戸岡旭

鶴唳 波戸岡

鑑賞会に臨み鑑賞を促したる

第一句集刊行以来二十一年、要はこれからの時代による
これからの時代に我が国の文化をかけることにある
波戸岡 旭

定価：本体2,700円＋税
ウエブ刊

編集室 この度、ウエブから波戸岡旭第7句集『鶴唳』が刊行されました。この句集の鑑賞をお願いします。今日は作者の波戸岡さんもご出席されており、遠慮のないところを仰って頂きたいとのことですので、よろしくお願いいたします。まずは、この句集を読んだ全体的な感想・印象から述べて頂きたいと思います。

須原 波戸岡さんの第3句集『菊慈童』のあとがきに「自然の中の自分」が、その自然の中に明るく強く生きることによって、「自分の中の自然」を幾たびも掘り起こし掘り返しして、もののいのちに触れること」とあります。それが波戸岡さんが句を作るとき心がけ、信条だと思っています。今度の『鶴唳』にもその信条・姿勢は一貫しているという感想を持ちました。

藤本 波戸岡さんが主宰する「天頂」の俳句理念として「自然の中の自分」「自分の中の自然」ということを掲げていらっしゃると思います。今度の句集でも、やはりその信条が貫かれているのだなあ、と思いました。波戸岡さんの句には、



前列右から増山氏、中西氏、水野氏
後列右から星野氏、藤本氏、坂田氏

ゲスト 坂田金太郎・中西夕紀

増山叔子・水野晶子

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第53回目です。ゲストは「青草」同人の坂田金太郎さん、「都市」主宰の中西夕紀さん、「秀」同人の増山叔子さん、「晨」「梓」「樺」同人の水野晶子さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 昨日は台風で、今日はまだ交通が乱れています。大変な時によくお集まりくださいました。

今日は高ポイントもありましたが、けっこうわれました。ではさっそく始めます。

けふりをる堅田の雨や新松子
5人が採っています。

◎◎◎◎◎

金太郎 「堅田」の地名が「新松子」の堅い感じにいいかなという気がして頂きました。

晶子 「堅田」の浮御堂の辺りは、松がホントにきれいで、そこに烟るほどに細い雨が降っていて、そこに「新松子」の緑が美しく見えて、すごくきれいな一幅の絵になるような句だと思って頂きました。

美和子 「堅田」という地名の効果が、とても大きいな、と思いました。「堅田」と言われてもさく分らないんだけど、堅